年頭に

―団結を、さらに団結を―

（一）

「朝日新聞」の十二月十五日号に、指名解雇通告を返した渋谷所の瀬川重勝さんの記事がのっている。その最後に、「瀬川さんは現在会社に〝私の作業日誌を公開しろ〟と要求、解雇が不当であると訴え続けている。計算すれば、いま勧告に応じた方が三十万円ほど退職金が多い。しかし、〝そのために仲間を裏切ることは出来ません〟と怒りで声もふるえていた」と書いてある。

「仲間を裏切ることは出来ません！」なんという高貴な言葉であろう。世の中には、知識を頭にいっぱいつめこんでいる人はいる。むずかしい哲学について講義のできる人間もいる。技術の学問で頭をいっぱいにしている人間も沢山いる。しかし、素朴に「仲間を裏切ることは出来ません」と腹の底からいうことの出来る人間、そしてこの言葉をそのまま実践することの出来る人間、このような人間は、知識や学問や技術だけでは生れない。

このような人間は、額に汁して働く人間の中からでなければ生れない。何故だろうか？

三鉱労組一万五千人の労働者が働かなかったら一グラムの石炭も生産されないように日本中の人間の生活に必要な一切の物資は、労働者が労働しなかったら生れない。労働者階級は、富を生産しているだけでなく、このことによって、文化の発展を支え、自分たちの独自の精神的富もつくり出している。いわば今日の社会とその発展を担っている。

（二）

このような人間の首を「切りすてごめん」の世の中にしようという人間がいる。利潤のためである。人間の労働を食つて肥えふとる資本のためである。

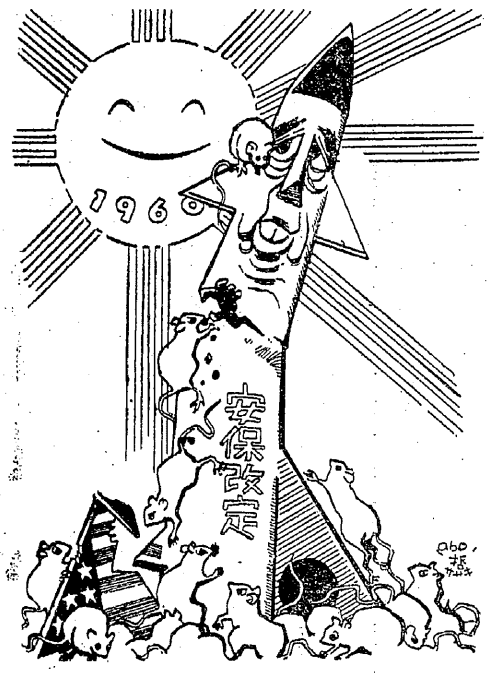
労働者が自分と家族を守り、人間による人間の搾取となり、機械となることに反対し、人間が人間を食うことのない社会を、すべての国民が平和と文化の中に幸福で生活のできる世の中をつくるためには、お互が団結して闘う外にない。われわれが平和と文化を願うだけでは、平和も文化も生れない。野獣のように、人間の労働を食いつくすために、われわれの平和と文化のための運動を妨害し攻撃する人間がいるからである。これを粉砕する方法は、われわれの団結力の外にはない。労働者階級の道徳の基本は団結の精神である。「仲間を裏切ることは出来ません」という精神は分らない。彼等は、競争者を裏切り、労働者に対する約束をぼろぎれのように棄てるならわしを、何の反省もなしに持ちつづけているからである。

彼等は人間の生活をどうすることがどういうことか考えたことはあるまい。彼等は人間の生命を奪う口実を見つけるのに血まなこになっている。三鉱労組を悪者に仕立てるために、どんなウソでも言っている。

しかし、正義は必らず勝つ。人間の生命を大事にし、勝手に首を切ることのできない社会を労働者階級自身の力でつくり上げようとしている運動が、どうして勝たないことがあろうか！

われわれの闘いの意義は全日本の労働者階級と共に「合理化」反対闘争の先頭に立っていることだけにあるのではない。安保改定反対、憲法改正反対、再軍備と戦争反対の闘いは、われわれの首切り反対の闘いを通じて前進の突破口をもつことになる。われわれは、三池炭鉱労働組合のためだけに闘っているのではない。全日本の労働者階級を「切りすてごめん」の社会から解放するという大きな使命を担って闘っている。このことが、全人類から人間による人間の搾取と抑圧を取り除くからである。

この歴史的使命を担って闘っている労働者だけが正に堂々と「仲間を裏切ることは出来ません」と言うことが出来るのである。それは、瀬川さんだけの言葉ではない全三池炭鉱労働組合員の声であるそしていまや全日本の労働者階級の声となろうとしている。



かじりまして
おめでとうございます
―子年元旦―

平和への道を築く年

―一九六〇年の展望―

中島健蔵

日本の政治は、戦後の現在でも政党よりは親分子分という人間のつながりと離合集散とによって動かされていた。二大政党の対立など日本では、いやらしい形でしか成り立たなかった。これは「選挙」という案外に丈夫な皮の袋に二つぶつかり合っているようなもので、おのおのの皮袋の中では、ごたごたと争いがつづいているのにが丈夫なために、破れずにすんでいるという状態であった。

一九六〇年になっても、このような姿がつづくであろうか。わたくしは、そういう不純な形も残るだろうが、自覚の強い対立がもっとはっきりと出て来るだろうと思う。対立が強くなることを恐れ、見かけ上の政治的安定を求める声が、中間層から出るが、そういう声は、現状維持が自分につごうがいいと思っている人々から出るのであって、そんなことになったら先の見通しが立たないと考える人間の自覚が、もっと強くなり、数もふえて来るだろうと思うのである。保守と革新の対立とか、労資間の緊張とかは、好き嫌いの問題ではない。支配者や権力者の方が力でおさえようとすればするほどそれをはねかえそうとする力も強くなる。そういう対立が、中途半端にしか政治の上に反映していないところに、日本独特のわり切れなさがあった。小がらな企業体を勘定に入れても、資本家の数よりは勤労者の数の方が多いのである。そういうはっきりした計算ができるにもかかわらず、勤労者の利益がじゆうぶんに守られていないのはどういうわけであろうか。

しかし、戦後の日本の動きを反省すると、あいまいな考え方がだんだんに少くなって来ている。大衆の考えが、だんだんに具体的になって来て、政治家の動きも、それを無視できないようになっている。あたり前のことのようだが、大衆の考えがあいまいであったところには、政治家の方で、自分につごうのいいような社会感情とか、ありもしない世論とかをかついで作り上げて、逆に大衆を動かしていたのである。今ではそういう勝手がだんだんにできなくなって来た。これは、ごく最近のことである。ついこの間までは、そんなわけにはいかなかった。大衆は、支配勢力になめられ切っていた。

一方、大衆の発言力が大きくなり、支配者にとってつごうの悪い動きが強くなるにつれて、支配者の方でも、対抗策を立てることに熱中するようになり、先手を打つて、押しつぶしてしまおうとするようになった。そうなれば、圧迫される方でも、がっしりとそれに立ちむかうほかならなくなって来る。

世界にも対立がある。しかし、一九六〇年が、平和共存の方向へ足をふみ出すことも、まちがいのないところだと思われる。平和の確保のために、世界中がこれほど真剣になった時はないのである。ところが、こういう世界史の動きに逆行しようと努力している人間がいるのである。平和がどのくらい大切であるかを、徹底的に知っていれば、米国と軍事同盟を結ぼうとしたり、流行おくれのジェット戦闘機を仕入れようとしたりするはずがない。結果としては、背のびをして対等になったつもりでも、衛星国になりさがり、世界史の動きの中でとりのこされることになる。これは人ごとではない。再軍備の売買が義務づけられたり大衆の自由が束縛されたりして、このままでは先の見込が立たなくなることが明かなのである。

一九六〇年は、日本にとっては平和への道を築きなおす年でなければならない。保守勢力は、国民の社会感情や世論をでっち上げることがむづかしくなったので、世界の動きをかつこに曲げて考え、それを国民に押しつけようとしている。これも、好き嫌いの問題ではなく、少数の利益のために、大多数の利益が犠牲にされるかどうかという分れ道の問題なのである。ほんとうに戦争が起つたら、元も子もなくなる。しかし、戦争の危険を見せびらかして、甘い汁を吸うのが、資本家の常道である。戦争が危険である以上、それを防止する努力こそ大切なのであって、人工的に緊張状態を作り出し、それを利用してひともうけ、というようなやり方には、あくまで反対しなければならない。

戦争の防止に必要なのは、軍事同盟ではなく、諸外国との友好関係の確立である。一九六〇年には中国との国交を、少しでも正常化に近づけるようにますます努力しなければならない。これもひとごとではなく、直接間接に、われわれの安全と幸福とを確保するための道である。いろいろな困難にぶつかつても、それに敗けずに、根気よく努力をつづけるうちには、日本の逆行を向けなおすことができるのである。（なかじま・けんぞう氏は評論家）

新年に際して

新年おめでとう。人類がいよいよ永続する平和の中に、社会主義社会の建設へ向かう一九六〇年代の最初の年を迎えた、という意味で、新年を祝福したいと思います。

米ソ両国とも原水爆をもち、とくにソ連が大陸間弾道弾をもっている今日、もはや戦争を起こすことはできません。また、ソ連の七カ年計画と中国の第二次五カ年計画は、いずれも六〇年代の前半期に完成する予定ですが、その成功は疑う余地がありません。毛沢東は、すでに東風（社会主義）は、西風（資本主義）を圧倒しつつある、といっています。

しかし、日本の風向は、世界の風向と逆になっています。この逆風に抗して、路上に横たわる障がい物をけりながら進んでいる日本の労働者の先頭に立っているのが三池炭鉱の労働者と主婦の皆さんです。皆さんの長期にわたる困難な闘争は、組合運動と社会主義をまもる闘いです。前途は明るいしっかり頑張って下さい。私も共に闘います。

登男良
具根
稔
中本泰
阿田坂

議院議員
衆議院議員
衆議院議員

望みある年を迎えて

日本社会党中央執行委員長

鈴木茂三郎

昨年の秋、フルシチョフのアイク訪問によって、平和共存への雪解けがはじまった。それは年があけるとともに、さらに進みつつある。この機運は、わが国の頑迷な支配者階層にも波及し、勤労者の闘いを発展させて、必ずや改定を阻止しなければならないと決意している。合理化反対、防衛費を削つて災害予算の獲得など、われわれの闘いは、多方面にわたり、しかもきびしい。しかし、これらの闘いをのりきったとき今日の局面は大きく打開できる。かつて、吉田から、石橋、鳩山時代へ転換したとき、多くの国民が明るく期待をもつたと同じように、平和と中立の政府の樹立へむかつて、政局は大きく動いていくであろう。これらの闘いのなかで、社会党は自らの再建を大衆諸君のなかで、しっかりとうちたてたいと心から念願している。昨年秋はしなくても、重大な闘いを前にして、党の再建が西尾新党分裂という痛恨な事態を生み、一時は停滞した。しかし、いまはすでに傷の痛手を克服し、われわれの力は前以上に闘いの試練の中で回復した。民主勢力の統一ということはなによりも大切である。おたがいにいろいろの立場や感情はある。しかし、なにはともあれ、大きな敵に対して、一つとなつて、この重大な局面をまず闘い抜こうではありませんか。

闘へる語

田中津根を

元旦や闘へる語の強く親し
二日はや雲にひざきて人車捲かる
冬枯れアカシヤー「首切りなくせ」と子の作文
悔ゆるなき決議や寒星鮮やかに
足凍てゝ声なしケージ全速に

一九六〇年に際して

日本共産党中央委員会議長

野坂参三

去年はフルシチョフ・ソ連首相のアメリカ訪問を、それにつづいて国連総会で行なわれた同首相の軍備撤廃に関する画期的な提案、〝国際紛争を話し合いで解決する〟と全世界に響つた米ソ両国主脳のあの共同コミュニケ等々、数々の平和への措置が具体的に提起され、全世界の人民から歓呼をもつて迎えられました。

このような世界の流れ――歴史の車は何びとといえども、それを逆転させることはできないでしょう。

しかし、世界には依然として反動的で好戦的な勢力が大きな力をもつています。その先頭にアメリカ帝国主義者が立つています。彼らは何とかして国際緊張を激化させ、冷戦をつづけようと必死になつて策動しています。岸内閣のたくらんでいる安保条約の「改定」も、その重要な一つです。

安保条約の「改定」は、政府が宣伝しているように、わが国の自主性を高め、完全な独立をもたらすようなものではありません。逆にアメリカの既得権を全部認め、そのうえにソビエト、中国を敵とした日米軍事同盟を強めることを目的とした危険な陰謀です。

昨年の十月、私は中国を訪れ、その際アジアの国ぐにの指導者たちと直接会談しました。そして痛感したことは、アジアのすべての国の人民が、こぞつてアメリカと岸内閣の安保条約の「改定」に深い疑惑と不安をもち、それに激しく反対しているということでした。

それにもかかわらず、岸一派は一月中旬に「改定」に調印、通常国会で批准させようとしています。これは私たちに対する挑戦でなくて何でしょう。

みなさん、この挑戦を受けて立とうではありませんか。先ず調印を阻止するために、元旦のこの日から、いままで以上の力をそそいで奮闘しようではありませんか。

団結の強さで

全逓小笠原支部から激励

師走の風も無情に吹きすさぶ中で力強く闘い続ける炭鉱の皆さんにただただ頭が下るしだいです。

われわれ全逓も貴方達とともに、反動岸政権に対し一丸となつて闘つております。

苦しいが頑張つて下さい。新らしい世の中をわれわれの手で作りあげましょう。

一本の麻は弱いがより合わせられた麻は岩をもくだく。